

学位請求論文審査報告書

氏名・（本籍地）	永野 淳子（東京都）
学位の種類	博士（人間学）
学位記の番号	甲第129号
学位授与の日付	令和3年3月15日
学位論文題目	家族介護者のケア決定とケア関係の再構築 —女性就労者の仕事とケアの両立の視点から—
論文審査委員	主査 坂本 智代枝 副査 宮崎 牧子 副査 神山 裕美 副査 佐藤 嘉夫

論文の内容の要旨（1200字以上）

本課程博士論文は、要介護高齢者（老親）のケアを担う就労者の介護離職が社会的課題となっているなかで、介護役割を担う率が高い女性就労者に焦点をあて、女性就労者がケアを担う決定プロセスとケア関係の再構築プロセスについて明らかにした基礎的な研究である。その内容は、同居してケアを担う女性就労者7名と別居してケアを担う女性就労者10名に各々2回インタビュー調査を丁寧に行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析して、同居の女性就労者の特徴と別居の女性就労者の特徴を明らかにし、女性就労者のケア関係の再構築プロセスをリアルに描き出した意欲的な研究である。

女性就労者にとってそれまでの親子関係から、介護を中心としたケアの二者関係に移行する老親と成人子とのケア関係について、ケア関係が仕事とケアの両立において見過ごされてきた。本研究の着眼点は、ケアの維持・継続のための生活の見直しに加えて、とりわけ女性就労者の老親とのケア関係に着目した点に特徴がある。

序章では、研究の目的と用語の定義及び研究方法について説明を行っている。第1章では、介護離職が社会的課題として指摘された要因について、介護の社会化として介護保険制度が施行される前後の家族の変化、老親ケアの困難化など家族介護の限界があったことを確認している。また、介護離職の実態についての把握から、女性就労者の介護離職リスクが高いことを確認し、仕事とケアを両立した自分らしい生活のためには、女性就労者の生活をさらに掘り下げて考える必要があることを指摘している。第2章では、女性就労者の仕事とケアが両立した生活を捉えるにあたり、これまでの親子の援助関係がどのように検討されてきたかを整理した。そして、女性就労者と老親とのケア関係が、再構築されるプロセスを把握することの重要性を指摘している。第3章では、調査概要と研究枠組を概観している。第4章では、同居の女性就労者を対象として実施したインタビュー調査の内容について、分析を行っている。分析の結果、「同居の老親をケアする女性就労者のケア決定とケア関係の再構築プロセス」について、カテゴリー10項目、サブカテゴリー1項目、概念31項目を生成している。第5章では、別居の女性就労者を対象として実施したインタビュー調査の内容について、分析を行っている。分析の結果、「別居の老親をケアする女性就労者のケア決定とケア関係の再構築プロセス」について、カテゴリー8項目、サブカテゴリー1項目、概念28項目を生成している。第6章では、女性就労者のケア決定とケア関係の再構築プロセスについて、先行研究と比較検討をしている。終章では、本研究の到達点と研究のオリジナリティをまとめて、その知見を踏まえて、汎用性の可能性について述べている。

本研究の社会的意義は、親と成人子とのケア関係が、家族介護を行う成人子のケアを担う生活に与えている影響について、同居と別居との比較検討を通じて、1つ目は女性就労者である家族介護者自身が老親ケアに挑むにあたっての心の準備を考えるうえでの知見、2つ目は家族介護者支援を行う専門職者が支援をする際の視点を提供できたことである。

審査結果の要旨（1200字以上）

我が国において、家族介護者の就業生活と介護の両立は社会的な課題である。本課程博士論文では、とりわけ介護役割を担う率が高い女性就労者に焦点をあて、女性就労者がケアを担う決定プロセスとケア関係の再構築プロセスについて明らかにした基礎的な研究として社会的意義を有するものと評価できる。

当該論文の審査は、予備審査を経て公開口述試問を実施し、内部副査の宮崎牧子教授と神山裕美教授、外部副査の佐藤嘉夫名誉教授（岩手県立大学）及び主査の坂本智代枝との博士論文審査委員会を実施した結果、四者の合議により一致して「合格」と判定した。

評価に値する点として、日本における就労者の老親のケアを担う研究は、統計的な研究が多く、特にケアを担うことの多い女性就労者の老親のケアを担う家族介護者に関する研究の質的研究は少ない。とりわけ、国内外の先行研究においても女性就労者が担うケア決定のプロセスは、明らかに示されていない。さらに、現在の超高齢社会において老親のケアを担いながら就労する家族介護者は増加している。そこで、本研究は女性就労者の要介護高齢者である老親とのケア関係の再構築プロセスについて、そのケアと就労生活との折り合いをつける関係構築の過程を明らかにした意義深い研究成果といえる。また、本研究の特徴は、継続的比較分析による質的研究であり、社会的相互作用があって人間行動を予測して説明できる手法により、女性就労者の老親とのケア関係の再構築プロセスが提示できたことに、社会的意義を見出せる成果でもある。

特に中核となる研究内容では、質的研究である修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる概念生成により、同居と別居の各々の女性就労者がケアを担う決定プロセスとケア関係の再構築プロセスを可視化したことは評価できる。とりわけ、女性就労者である家族介護者と老親とのケア関係の形成史と世代間葛藤に視点を当てながら、アンビバレントな感情を抱きつつ、一方向からあるいは因果関係だけでは説明ができない矛盾に満ちたケア関係の再構築プロセスを辿っていることを可視化できたことは、本研究の評価できる特徴である。さらに、老親との同居と別居の家族世帯形態別の分析を行うことで、ケア関係や世代間葛藤を基礎づけている家族そのものの課題が明確にされている。ケア関係の再構築プロセスは、別居子の場合は独立した主体としての一種のケア契約締結の見直しの意味合いが強いことであった。一方同居子では、単に老親をケアするべきといった家族規範力の影響に留まらず、老親ケアの客観化が難しい中で、自立した生活主体者として自己決定及び選択が困難であることであった。こうした同居子、別居子のケア関係の再構築プロセスの相違点を明確にできたことは成果として評価できる。

一方で本課程博士論文には、以下のような課題も見られる。本論文において焦点化した女性就労者のなかでも、40歳代から50歳代に限定していることと、職業や居住地域に偏りがあることから、研究成果の汎用性の範囲が限定されることである。さらに、同居のなかでも別居から同居になった場合と同居から施設入所等の別居になった場合や、女性就労者の内で多くを占める非正規就労や時短就労などの女性就労者の老親ケアに焦点をあてるべき課題もある。女性就労者がケアを担う決定プロセスとケア関係の再構築プロセスの特徴や課題は考察されているが、やや現象面の説明に留まっており、ソーシャルワークの理論的枠組みから実践的及び施策的な示唆への具体的な検討がなされていないところに物足りなさがある。さらに、本研究の知見を踏まえて、家族介護者支援についての実践的、施策的な方策の示唆を具体的に検討することが今後の課題である。

以上のように評価すべき点と課題を総合的に審査した結果、本大学院博士後期課程における課程博士論文の審査基準に適合した博士学位論文として認定できる。

公表予定

日程	令和3年 3月 15日
公表形態	① 掲載誌名：【鴨台社会福祉学論集】【29】号【89-90】頁 【全文・要約】 ② 単著（発行者）
題目	<※タイトルを変更した場合>